



緑化 中国で持続可能な緑化を目指す

内蒙古自治区中部で、地元の住民と砂漠の緑化を行っています。活動地域は、包頭の南西、黄河の南に分布するクブチ砂漠の東端。カシミアヤギの過放牧で、砂漠化が急激に進んでいる地域です。

中国で緑化活動を始めたのは1994年です。日本沙漠緑化実践協会の職員として働きながら、自分なりの緑化手法を模索する日々が続きました。4年目の任期終了を機に独立。2000年に「地球緑化クラブ」を立ち上げました。

緑化には、現地ですぐに入手できる資材だけを使います。まず、麦わらなどを格子状に地中に差しこんだ「草方格」で砂の移動を止めます。その内側に、マメ科の牧草のヤンツァイ、果汁が健康飲料になるサジー、パルプの原料になるサリュウを植えます。いずれも昔からこの地に生えている、換金性の高い植物です。乾燥に強いので、灌漑も必要ありません。

緑化が産業と結びつけば、地元の住民が自主的に草原を広げていくようになります。私たちがいなくなっても緑化活動が続くような仕組みを作ること。そうした取り組みを、ほかの地域でも行っていければと考えています。

——原鋭次郎・地球緑化クラブ代表



格子状の「草方格」で砂の移動を止め（上）、ヤンツァイ（下）などの植物を植える。原さん（右から二人目）は活動のできない冬の間、日本の造園会社で働いて技術を磨く。「緑化現場を知り尽くした職人になりたい」と抱負を語る。

地球緑化クラブ

<http://www.ryokukaclub.com/>